

令和 4 年 6 月 12 日現在

機関番号：34310

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2021

課題番号：20K21972

研究課題名（和文）平安朝漢文学における中国故事の研究 『蒙求』の古注を端緒として

研究課題名（英文）A study on Chinese historical ancient events accepted by Chinese prose and poetry in the Heian Period; As a beginning the ancient notes of Mogyu

研究代表者

柳川 響 (Yanagawa, Hibiki)

同志社大学・文学部・助教

研究者番号：50876802

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、『蒙求』の古注が平安時代の漢文学にどれほど影響を与えていたか、『蒙求』受容の実態を解明することを目的として、空海が著した『聾瞽指帰』に『蒙求』の影響が見られるかを検討し、『蒙求』の標題を基に中国故事を横断的に収集して研究基盤を構築し、平安時代の漢文学がいかなる漢籍によって故事を受容していたかということについて考察することを目指した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『蒙求』の古注は平安時代の文学に大きな影響を与えたとされるが、具体的な例もあまり指摘されておらず、実際にはどれほど影響したか、その実態は不明瞭なままであった。本研究では、空海の『聾瞽指帰』をきっかけとして、平安時代の漢文学における『蒙求』の受容について実証的に検討した点において学術的な意義がある。また、『蒙求』の標題を基に故事を横断的に整理し、研究基盤を構築することは文学研究以外の分野にも有益であると考えている。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the actual situation how much influence Mogyu gave Chinese prose and poetry in Heian Period: (1)I examined the extent to which Kukai wrote Rokosiki under the influence of Mogyu. (2)I collected Chinese historical ancient events based on Mogyu and established a research foundation. (3)I considered what kind of Chinese classics influenced Chinese prose and poetry in Heian Period.

研究分野：日本文学

キーワード：蒙求 平安時代 漢文学 聾瞽指帰 漢籍

### 1. 研究開始当初の背景

本研究における『蒙求』の古注とは、国立故宮博物院蔵上巻古鈔本(平安時代末期書写)と真福寺宝生院蔵下巻古鈔本(鎌倉時代末期書写)に記されている注を指す。そもそも『蒙求』とは、唐の李瀚が初学者のための教科書として編纂した漢籍である。古人の有名な伝記や言行を四字句の標題で表し、類似するものを二句で一對とし、全部で五九六句を収めている。撰者の李瀚によって標題ごとに注が付けられたが、南宋の徐子光が標題と注を改訂・増補して補注本を作ったことで、李瀚の自注本(古注本)は次第に姿を消していった。しかし、その自注本に近い形態を残していると考えられるのが上記の国立故宮博物院蔵本と真福寺宝生院蔵本である。

『蒙求』は平安時代初期に日本に渡来して以来、幼学書として用いられ、平安朝文学に小さくない影響を与えたとされる。『蒙求』を学ぶ際には注も一緒に読まれたと考えられているが、文学作品において古注が受容された例はあまり多く指摘されておらず、古注そのものの研究と併せて課題が多い。『蒙求』の古注は近年、日本文学や中国文学の研究者に注目されつつあるが、翻刻や注釈を含め、研究はまだ進んでいない。影印や写本でなければ全文が見られないことは研究の障壁となっており、『蒙求』の古注がどれほど平安朝文学に影響を与えているか、その実態は具体的に明らかになっていない。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は大きく二つあった。一つは、平安朝文学における漢籍の受容を考える対象として、空海の『聾瞽指帰』を取り上げて考察を行うことであった。『聾瞽指帰』は儒教・道教の二教よりも仏教が優れていることを戯曲的な構成で説いた仏教書であり、四六駢儷体で記されている。序文に延暦十六年(七九七)とあり、空海が二十四歳の時に著述したとされるため、空海の初期の学問を最もよく表した作品と言える。これまでも岩波文庫や日本古典文学大系、日本思想大系など、多くの注釈書が造られてきたが、『蒙求』などの幼学書や類書の影響についてはあまり注目されてこなかった。それゆえ、『蒙求』の古注を含め、原拠となる漢籍以外の本文を取り上げて検討するところに新しさと独創性があった。

もう一つは、平安時代に利用された漢籍の実態を明らかにすることであった。すなわち、『蒙求』の標題に見える故事ごとに項目を立て、他の漢籍から関連する本文データを抽出して整理を行い、索引を作成することで、平安朝文学の研究基盤を作るというものであった。これまでの文学研究では、各作品や個々の漢詩文ごとに注釈が施されてきたため、ごく限られた範囲の中でしか成果が得られず、作品間の影響関係や背景にある学問的基盤などを広く見通すことは難しかった。しかし、本研究では中国と日本の主要な典籍から横断的にデータを収集することで書籍間の影響関係を明らかにし、平安時代の漢文学が『蒙求』の古注を受容しているか、また、他のいかなる書籍を典拠として記されたかを巨視的に捉え直すことができることに大きな特徴があった。そして、これらを集約した研究基盤を構築することによって、今後の文学研究に寄与することを目指した。

### 3. 研究の方法

平安時代において『蒙求』はどのように学ばれたか、また、その受容は古注を含んだものであったか。この問題を検証するため、以下の三つの方法で研究を行った。

(1) 『蒙求』の古注と『聾瞽指帰』の本文とを比較することで、空海が『蒙求』を用いて『聾瞽指帰』を著述した可能性を検討する。

(2) 『蒙求』の標題を基に中国故事を横断的に収集し、古注と他の漢籍とを照合することでデータを整理し、研究基盤の構築を目指す。

(3) 平安時代に漢文で書かれた諸作品の故事の受容について、(2)の研究基盤を基に検証を行う。

なお、(2)で用いた漢籍は、注の付いた形で受容された李善注『文選』(梁・昭明太子蕭統の撰、唐・李善の注)、『世説新語』(劉宋・劉義慶の撰、梁・劉峻の注)、幼学書の『千字文』(梁・周興嗣の撰、五代・李暹の注)と『李嶠百二十詠』(唐・李嶠の撰、唐・張庭芳の注)、唐代の類書である『芸文類聚』(唐・歐陽詢らの撰)と『初学記』(唐・徐堅らの撰)である。いずれも平安時代に故事を引用する際にしばしば利用された漢籍である。

### 4. 研究成果

1年半の研究期間において、主に(1)と(2)について研究を行った。まず、(1)については、『聾瞽指帰』に引用されている中国故事を『蒙求』の古注や他の漢籍と比較することで、空海が『蒙求』の古注を利用した可能性について検討した。現存する資料に限りがあるため、断定することは難しいが、空海が『蒙求』の古注またはそれに類する幼学書ないし類書から中国故事を学んだ可能性を指摘することはできると結論付けた。また、(2)については、『蒙求』の標題を基に主要

な漢籍から中国故事を横断的に収集し、古注と他の漢籍の本文とを照合することでデータの整理を行った。

当初の予定より研究が遅れたため、研究成果を発表するには至っていないが、2022 年度中に(1)と(2)については成果をまとめ、論文などで発表を行う予定である。そして、(3)については今後の継続的課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 柳川響
2. 発表標題 『聾聵指帰』における中国故事の受容
3. 学会等名 同志社大学国文学会 2020年度秋季大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------